中学校一年の部　佳作　――　対象作品／ブレイディみかこ著『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社

多様性の大切さ

弘前市立東中学校　小野史織

「僕は、人間は人をいじめるのが好きなんじゃないと思う。……罰するのが好きなんだ。」これは、本書の中で主人公（息子）が言った言葉です。

私がなぜこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本を選んだかというと、本のタイトルが気に入ったからです。そして、本を読むのが苦手な私でも読めそうだと思ったからです。

この本の著者であるブレイディみかこさんは、イギリス南部の都市ブライトンに住んでいるライターです。そして、夫はアイルランド人、息子が一人います。もともとは、比較的お金に余裕のある人が住んでいるエリアにいて、そこに小学生の息子が通っていました。そのままいくと、カトリック系の穏やかで上品な学校に通うはずでしたが、ある日突然、息子が元底辺中学校に通うと言い始め、進学します。そして、その中学校では、差別や貧困などの様々な問題があり、その問題を僕（息子）とパンクな母ちゃんは、ともに考え、悩み毎日を乗り越えていく、そんなリアルなストーリーです。

私は、この本の中で三つの場面が印象に残りました。

一つ目は、元底辺中学校でのアラジンのミュージカルで、アラジン役のダニエルの声が本番で出なくなった時に、息子が舞台裏でかわりに歌っていた場面です。

実は、私も小学校での劇で似たような体験がありました。その劇では、俳優と声優などに分けていました。なので、俳優の動きと声優の声がバラバラな時もあったりしました。

ある日、声優の人が何人か休んだ日がありました。そして、その日、劇の練習では他の声優の人達が、休んでいる人の分を全員で分けて担当していたのです。私はこの光景を目の当たりにして、とても驚きました。私は、改めて協力することの大切さを知りました。

二つ目は、元底辺中学校の古参教師のミセス・パープルと呼ばれている人が主人公の母ちゃんと話している時に、ミセス・パープルが次のように言った場面です。

「お腹がすいているとき、他の子たちも同じ境遇だったら口に出して言えるけど、自分だけだったら言えなくなる。」

私はこの文を読んで、多数決の時の自分を思い出しました。私はいつも、「この選択肢なら多数派のはず」などと、自分の意見なども無視してでもそうしてしまいます。

なぜなら、多数派にいることで安心するからです。少数派になると、多数派よりも味方が少なくなり、不安な気持ちになってしまうからです。ですが、このままでは周りの意見にふり回されることになってしまうので、普段の生活の中でも自分の意見を言うようにしていって、少しずつでも直していこうと思いました。

三つ目は、夏休みに日本に帰省した時に、ＤＶＤのレンタル屋に行き、ＤＶＤをかりるため、会員登録をする場面です。そこでは母ちゃんのかわりに配偶者が登録をしようとしますが、あまり目が良くなく、母ちゃんが指示をしていると、店員さんに日本人ではないということに嫌悪感を表わにされてしまいます。

私はこの場面を読んで、差別意識のことなどを考えました。さきほどの場面のように、外人というだけで嫌悪感を表わにされていて、私は、肩書きだけで人を判断するのはあまりよくないと思いました。ですが、その差別意識を無くすることは難しいと思いました。

なぜなら、考えがすべて一緒ということがほとんどないからです。なので、自分でも少し考え方を変えてみたりしていこうと思いました。

私はこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』という本を読んで、イギリス社会の様々な側面が凝縮されていると思いました。

この本で学んだことは、多様性の大切さです。私は最初、「多様性は、差別やトラブルの原因になるからむしろないほうがいいんじゃないか？」と思っていましたが、この本を読んで、確かに多様性はめんどうだけれど、その分知らないことを知ることができると思いました。ですが、知ろうとしなければ、無知なままになるということを知りました。

そして、この本を読んで学んだことを生かせる場面があったら、生かしていこうと思いました。